



9月24日(日)早朝、ハリケーンが弱まり、進路がそれたとの情報により、マーサズ・ヴィニヤード島へ行くことになりました。半島から島までフェリーで約40分です。私は船酔いの質ですので、甲板の先端の椅子に一人で座り、大西洋の波や、対岸に微かに見える島影を眺めながら、外気に当たっていました。かなり気温が低く、曇り空で、風もありました。舵も帆もなくなり、大海で流されるままになった漂流民、食べ物、水も底をついた漂流民の気持ちになったつもり…には、なかなか耐えられません。彼らは本当によく生きてくれました。

ヴィニヤード島はニューヨークやボストンの富裕層の避暑地として有名で、たくさんの風光明媚なビーチでの散策、ハイキング、キャンプ、釣り、マリンスポーツ、海の味覚を楽しむことができる場所とのことで、この日も観光客が大勢来ていました。島の南のエドガータウンがピース船長の故郷です。多くの業績を挙げた船長の資料がこの図書館に保存されています。

図書館では一日遅れとなりましたので、研究司書の方は出張中。市沢氏が電話で事情を伝えていたのに、受付係員には全く伝わっておらず、あわや、無駄足となるどころでした。



ところが、ナンシーさんが、研究司書の方が、ピース船長の資料のファイルを一纏めにして置かせてくださっているのを発見！係員の方に司書の方に連絡を取って頂き、やっと閲覧の許可ができました。



稲垣さんは、ピース船長が1853年ニューヨークとエドガータウンで開催する万博に、カリフォルニアの責任者、代表者として行くように辞令を受けていて、その辞令の原本を発見し、大喜びでした。この博覧会にジョセフ・ヒコら、漂流民が持っていた日本の品物、また、ヒコが書いた文字などが出品され、新聞記事として記録が残っています。万博で日本が紹介されたのはこの時が初めてでした。もう一つは、手書きの日記です。関連性のある年代の部分を読みました。残念ながら、求めていた日本人の名前を発見することができませんでした。「ないということが分かればよい」と稲垣さんが言われました。彼女の真剣さがヒシヒシと伝わり、また、目的を果たした喜びをにじませておられました。これで今回の調査研究の完了となりました。

